

国語科教材としての連句の有効性とその指導試案 (2)

国語科 宗我部 義 則

目 次

I	はじめに—これまでの研究の展開とその概要	22
II	連句という文芸, その特質	23
	(1) 連想と転じによる作品の展開	23
	(2) 座の文芸としての連句	24
III	国語科教材としての連句	25
	1. 前句の創造的な読み→イメージの展開と言葉への定着化	26
	2. 座のコミュニケーションの中での共同制作	30
	3. 創作過程での視点論の導入	33
	4. コンピュータ・ネットワークへの対応	35
IV	中学校での連句指導試案	38
	(1) 連句の形式と式目	38
	(2) 主な指導内容	39
	(3) 句会の場面での教師の指導の仕方	40
V	今後の課題	41
	(1) 指導法の側面から	41
	(2) カリキュラムへの位置づけの側面から	42

要 旨

連句の創作現場。そこには機知に富んだ丁々発止のやりとりがあり、折々の季節感や人情の機微を発見する喜びがあり、なにより共同制作をとおして人々の心が一つになる確かな手応えがある。国語科の新教材として魅力あふれる連句の特性は、コミュニケーションの喜びに支えられた楽しい表現活動を子どもたちにもたらずはずである。

私は1992年から、国語科の教材・学習活動の開発の視点から連句の研究に取り組んできたが、その中で指導展開の基本的なスタイルを作り、また国語科の学習として導入していく上での手応えと課題を得た。この実践については、本校『研究紀要第22集』において、「創造的な読み手を育てる連句の指導(1)—国語教材としての連句の可能性を探る—」として報告した。本稿はこれ以後のいわば第2次の実践研究について、『両輪』『月刊国語教育研究所』などの国語教育関係雑誌等に寄稿した実践報告を整理、加筆修正する形でこれまでの成果をまとめ、中学校国語科における連句指導の指導試案を提案することにしたい。

I はじめに —これまでの研究の展開とその概要—

連句の創作現場。そこには機知に富んだ丁々発止のやりとりがあり、折々の季節感や人情の機微を発見する喜びがあり、なにより共同制作をとおして人々の心が一つになる確かな手応えがある。国語科の新教材として魅力あふれる連句の特性は、コミュニケーションの喜びに支えられた楽しい表現活動を子どもたちにもたらしはらずである。私は1992年から、国語科の教材・学習活動の開発の視点から連句の研究に取り組んできたが、この間の実践と、それぞれの主な研究の視点を概観するとおおよそ次のようになる。

第1次

(1) 実験的試行 (1992.2 対象：3年生) ※私立入試の中心日に二時間ほど実施

- ・導入教材として芭蕉の代表作「市中歌仙」の表六句を使用。
- ・十二句の独自形式を考案

(2) 授業への導入 (1992.3 対象：2年生)

- ・導入は(1)の3年生の作品を教材に使用し、連句のやり方を考える。
 - ・全員で発句に脇を付けて、付句の作り方を学習。その後グループ学習により句会を進める。
 - ・「導入→付け合い→披講→自解」という以後の連句の授業の基本スタイルが作られた。
- ※「創造的な読み手を育てる連句の指導」1992 (お茶の水女子大学附属中学校紀要・第22集), 「創造的な読み手を育てる詩の指導 連句教材化の試み」1992 (東京学芸大学国語教育学会研究紀要「文学の<読み>の指導3」) に報告

第2次

(3) 対話への着目 (1994.3 対象：1年生)

- ・単元名を「対話と詩の創作」と設定。導入から脇句作りの展開は(2)と同じ。
 - ・対話への着目(句の応酬に見る対話、句を作るための対話)＝句会を対話学習の場として活かし、連句の授業を総合単元へと発展させようとした。
 - ・対話と句作の支援として「発想のヒント」「題材リスト」を考案。
- ※「連句であそぼう！」1994 (『講座音声言語の指導3 話し合うことの指導』高橋俊三編著 明治図書) に報告

(4) 視点論の導入 (1994.12 対象：2年生……(3)の学習を体験した生徒)

- ・昨年度自分たちで作った作品を鑑賞することで学習をふり返る導入。
 - ・より変化のある作品を呼びかけ、そのための手だてとして、付句の発想段階に「人情自他の区別」(連句の付句創作における視点論)を導入。
- ※「対話と詩の創作 連句で遊ぼう」1995 (国語教育実践理論研究会「研究紀要」) に報告

(5) 歌仙形式の試行とパソコンネットワークの活用 (1995 対象：選択国語履修の3年生8名)

- ・ 1, 2年で連句創作を体験した生徒について, 選択教科国語の時間を使って, より本格的な連句の創作を呼びかけたもの。
- ・ 輪講式で『連句のすすめ』*1を読み, 「歌仙」形式について学習。
- ・ パソコン教室のLANを使って, オン・ラインで句会を開いた。

※「グループウェアを活用した連句の授業—選択国語の授業の試みから—」1995(『月刊 国語教育 研究』281 日本国語教育学会)に報告

(6) 付句の発想・連想を広げる指導法の工夫 (1996.7 1997.6 対象:ともに1年)

- ・ 前句を読んで付句を創作する段階の指導において, ブレインストーミングを導入して, 発想の幅を広げようとした実践。

※「国語科教材としての連句」1996(第59回日本国語教育学会 中学校・言語生活分科会), 「国語科教材としての連句の可能性」1996(第95回全国大学国語教育学会提案)で提案。「連句で遊ぼう! 国語科教材としての連句の有効性とその指導試案」1997(『国語教育の理論と実践 両輪第23号』両輪の会)に報告。

上のうち(1)(2)は, 連句という文芸の実作が俳句や短歌の創作と同様, 中学生に可能かどうかを試行する段階であった。この中で中学生にも連句の創作が可能であるという手応えと, 国語科教育への導入上の課題を得て, (3)以降の第2次の研究段階へと進むことになった。この第1次の実践については, すでに本校研究紀要第22集(1992)において, 「創造的な読み手を育てる連句の指導(1)—国語教材としての連句の可能性を探る—」として報告した。本稿では, この報告以後の第2次の実践研究について, 上記各誌に寄稿した実践報告を整理しなおして, これまでの成果をまとめ, 中学校国語科における連句指導の指導試案を提案することにしたい。

II 連句という文芸, その特質

連句は様々な約束(式目*2)にしたがって, 五七五の長句と七七の短句を一定の句数だけ交互に連ねていく中で, 四季折々の季節感や人情の機微を描き出す, 共同制作の文芸である。ここでは, 前稿との重複を避け, 教材化にあたって着目した連句の主な特質を二点指摘したい。

1. 連想と転じによる作品の展開

『去来抄』の「岩鼻やここにもひとり月の客」の句をめぐるやりとりや「誠に作者そのころをしらざりけり」という去来の感懐を引くまでもなく, 連句という文芸においては, 読者が作者の創作意図とはまた別のところで作品を成立させようことを前提にしている。すなわち, 作品には作者の思想なり意図なりがあって, 読者がそれを読みとることを近代文学の作者は要求してきたのだが*3, 連句の作者は自分の創作意図を理解してもらうことを期待しつつ, 同時にどう解釈されるだろうかと, 作品の読みを読者に開放する発想・態度を持って俳席にのぞむので

ある。典型的な例を見てみよう。

- | | | |
|---|----------------|-------------------------|
| A | 桐の木高く月さゆる也 | 野坡 |
| B | 門しめてだまって寝たる面白さ | 芭蕉 |
| C | ひらふた金で表がへする | 野坡（「梅が香の巻」芭蕉他『炭俵』元禄7所収） |

「桐の木を月が照らしている」というAに、それを風流な隠者の住まいの庭とみた芭蕉は、「こんな夜は一人静かに過ごすのもなんと風情がある」と、その隠者の様子を描いてみせる。ところがCは、Bの人物は「実は拾った金で畳の表替えをして、すがすがしくなった部屋で一人寝転がっているのだ」と転じている。Aからの連想で風流好みの隠者として登場したBの人物は、Cでは一転してごく庶民的な人物にと読み変えられているのだ。Bの句についての野坡の解釈は、おそらく芭蕉（B句の作者）の意図するところではない。あくまでB句の読み手である野坡の作り出した解釈、新しい意味である。これは野坡が芭蕉の意図をまったく無視したり、あるいは野坡の力不足で芭蕉の表現を読めなかつたりしたのではない。むしろ前句作者の意図も、付句作者の転じも、二人の作者がお互いに理解し合って、それを楽しんでいるのだ。そしてこの食い違いの妙味が、一座する作者たちを次の付句の創作へと駆り立てる原動力になるのである。

近年、読者論を背景とした読みの指導観・学習観が国語教育界で注目を集めているが、連句においては、読者としての付句作者が前句の意味を創り出し、そのイメージを展開して付句を付けるという表現・創作へとつながった、より積極的な言葉へのアプローチを、連句創作という活動自体のうちに含んでいると指摘できよう。

2. 座の文芸としての連句

尾形叡氏は「芭蕉にとって座とは、その詩情を誘発し、増幅し、普遍化する、いわばかれの詩の成立・定着にとっての不可欠の媒体であったといえる。」⁴と指摘するが、上に述べたことを合わせて考えると、それは一人俳諧の求道者芭蕉だけのケースではなく、連句の実作に関わる多くの者にとっていえるだろう。座に異質な他者が存在すると、その数だけ前句の解釈と付句の発想が生まれる。そのせめぎ合い・響き合いの中から一つの作品が成立していくのである。

さて、連句の句会はふつう複数の作者が順番に付け進める「膝送り」や、付句のできた者が句案を出し、複数の付句案の中から捌き役（どの句案を採用するかを式目に照らしつつ判断する役。通常は一座の宗匠）が一句を選んでいく「出勝ち」と呼ばれる進め方で行われる。このとき捌き役を置かず、参加したメンバー全員で付句を検討して採用句を決めるやりかたを「衆議」という。句会の参加者は、その制作過程で交わされる句の解釈や付句の発想をめぐっての会話や、付句に関するさまざまな話題を楽しみながら次々と新しい付句を生み出していくのだ。

付句の案が提案されると、その句案が前句にどう付くのか、あるいは式目に違反がないかな

どを考えながら、付句として採用するかどうかを検討することになる。このとき、いくつかの付句候補の中から一句を選んだり、ある付句の案を治定（採用）するかどうかを判断する上で問題になるのは、付句案のテーマ（何を表現しようとしたのか）よりむしろ、モチーフであるということができるかもしれない。前句をどう解釈し、どこでどう前句につくのかを考えるのは、まさに付句のモチーフを探ることになるのであり、句案のテーマに鑑賞の重点が移るのは、その句が治定して次の付句の創作に入った段階であるといえそうだ。

一般の句会では捌き役が句の採否を決めていく「捌き」というやり方が多いようであるが、国語教室では衆議による付句の治定が望ましいと考える。付句の評価が上に見たように創作表現のモチーフを読むことであるとすれば、それは、付句作者の感じ方や発想の源を読むことだからであり、そこに仲間同士の他者理解と通い合いが生まれることが期待されるからである。

この連句創作における他者理解については、興味深い指摘が専門の詩人たちによってなされている。大岡信氏らの試みをはじめ、海外でも連句が行われるようになったが、大岡氏らと「RENGA」を体験したメキシコの詩人オクタビオ・パスは、次のように感想をもらしたという。

西洋の諸々の信条に反する制作行為である連歌は、われわれにとっては一つの試練、小さな煉獄だった。^{*5}

「RENGA」の創作では「人前で排泄する」かのような気分を味わったと彼はいうが、その意味は次の草間時彦氏の言葉で理解できる。^{*6}

西洋の詩の場合は、詩を作るという作業が必ず個室の中で行われるわけですね。人の面前で詩を作るという作業は、詩人は少なくともやらない仕事だと思えますよ。

この二人の言葉には連句の注目すべきもう一つの特徴が語られている。発想・習作段階を人前にさらず連句の創作は、いわば共同制作をする他者の前に自分を開き、まだ形になりきらない自分のイメージに他者が参加することを認め合うことを前提として成立する創作行為なのだ。

III 国語科教材としての連句

連句はこれまで学校教育の中でほとんど取り上げられて来なかったが、上に見たような連句自体がもっている特性の面からも、また、これまでの数次にわたる実践的研究の上からも、国語科教材として非常に多くの魅力をもっていることを実感している。

連句も俳句や短歌と同様、定型の短詩型文学である。したがって、これまで俳句や短歌が有効な国語科教材として取り入れられてきたさまざまな理由（定型・短詩型文学としての魅力^{*7}）は、ほとんどそのまま連句にもあてはまる（前稿参照）。しかし連句が俳句や短歌と決定的に違うのは、「II 連句という文芸、その特質」に見たとおり、「ある一つの句の創作で完結せず、一つの句が新たなモチーフとなって次の句の創作が連鎖的に行われる」点と、それが「共同制作によって行われる」という点であろう。この点をいかに有効に授業の中に、学習活動として

取り込めるか、さらに言えば、共同制作のコミュニケーションの場の中で、「座」のエネルギー＝生徒たちの言語表現の創作エネルギーを、国語教室の中に、現代の子どもたちの中に形成していくこと、ここに国語科教材としての連句の可能性と課題がある。以下、これまでの実践例を具体的に示しつつ、国語科の教材としての連句の有効性を、次の各点から整理してみたい。

1. 前句の創造的な読み→イメージの展開と言葉への定着化
2. 座のコミュニケーションの中での共同制作
3. 創作過程における視点論の導入
4. コンピュータ・ネットワーク活用への対応

1. 前句の創造的な読み→イメージの展開と言葉への定着化

連句で付句を付けるということは、次のような過程としてとらえられる。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 前句の読み＝創造的な〈読み〉<ul style="list-style-type: none">・句意の理解と創造。レトリックの理解。・場面や情景，ものごとを具体的にイメージする。② 付句の創作＝イメージの展開と言葉への定着化<ul style="list-style-type: none">・想像を広げ，連想を働かせて，イメージを拡充・深化する。・新しく創造されたイメージを言葉に置き換える。・イメージを定着させるために言葉を選択し，定型に整える。③ 読みと創造の結果としての付句の提出＝作品発表 |
|---|

連句の創作現場においては、つねに前句の読みとそれをモチーフとしての付句の創作が交互にあるいは同時に行われていく。ここで、前句の読みにおいては先に「連句の特質」で見たとおり、その解釈は付句作者にゆだねられている。つまり、付句作者は自由に前句に関わり、イメージや意味を作り出して、それを発展させて付句に表現するというたいへん主体的かつ能動的な学習活動を常に繰り返すことになるのである。連句創作がもっている他の創作活動にない魅力がひとつここにあるといえよう。

こうした読みの行為を連句創作の学習活動の中で有効に機能させるためには、前の句をどのように読み解き、そこからイメージを膨らませるか、そのやりかたを具体的に示すことが必要になる。また、どのように前句の読みをより創造的なものにするか、前句を読み広げるというのはどういうことか、その指導方法を開発することは、単なる言葉遊びやステレオタイプの発想での付句創作から抜け出させるためにも重要である。稿者自身は、これを発句から脇句を作る場面での一斉学習の中で、生徒自身が体験的に学べるようにし、やり方がつかめた第三句以降はグループ学習での話し合いにゆだねることにしている。実践例を二つ示してみたい。

なお、この後に示す各実践例とも、基本的には「I はじめに」の「第1次(2)」の実践で作ら

れた単元展開をとっている。単元全体の展開については、前稿『研究紀要 第22集』1992、または、市販されている『講座音声言語の授業3 話し合うことの指導』(明治図書)を参照いただきたい。

【実践例1】 1996.7 対象：1年生

前句の読みにあたって、まず発句から受ける印象(=a)、連想する言葉(=b)をプリントに思いつくだけ書き出すブレインストーミングの手法を取り入れることにした。こうして思いついた言葉の中から付句の発想を得て、定型句に定着させるようにしたのである。

授業では各自の脇句案ができたところで発句ごとに句案を集め、読み上げて全体に発表しながら秀句を選んだ。初めての連句創作の場面でもあるので、脇句の例を全体に示し、同じ発句にさまざまな解釈が可能であることを体験的に学びつつ、付句の発想の仕方をひろげることになる。これをもとに、生徒たちが前句を創造的に読み味わい、イメージを展開していく様子を示す。

ア 遠花火海のかなたにふと消えぬ (素逝)

ゆかた着て聞くふうりんの音

- a 縁側で夕涼みをしながらうちわであおぎ、ふうりんの涼しい音を聞いている感じ。
- b 浴衣・スイカ・蚊取線香・端居・縁側・風りん・すだれ・か・うちわ・ほうずき

イ 遠花火海のかなたにふと消えぬ

最後の一本線香花火 (初案)

今年の夏もヒュルルルドン ↓

散りゆくすがた秋のおとずれ (最終案)

- a かなしい、夏が終わりかかっている。
- b 場面は夜で高台の上で花火を見る。

ウ 遠花火海のかなたにふと消えぬ

夢の粉まい胸おどらせる

- a しっとりとした感じ。寂しげな感じ。夏の夜の感じ。
- b 暗い海・静かな海・暗い海に明るい花火がきれいに広がる。

この発句については、「遠花火」「ふと消えぬ」という言葉から、寂寥感をともなって夏の終わりの季節感を感じとる生徒が多かった。時間がうつつていく感覚をとらえている。アはくつろぎの中に夏の夕暮れを表現しようとし、イは夏が終わっていくという季節感を直接言葉に定着させようと試みている様子がうかがえる。ウはしっとりとしたさみしさを感じつつ、花火大会のまさにその瞬間を描こうとしている。

エ 雲焼けて静かに夏の夕かな (虚子)

出店の灯火ホオズキの朱

- a 祭の前の感じ

b 祭り・スズムシ・風鈴・寺の鐘・浴衣・ウチワ。まだ人の来ない夜店のほの明るい光の中にホオズキの朱が溶け込んでいる。

オ 雲焼けて静かに夏の夕かな

稲の穂の下虫の鳴(音)ひびく

a 雲がふんわりとしている感じ。暑さがほどよい感じ。

b 雲が夕焼けに染まっている場面。雑音もなく静かなあまり夏でも暑すぎない場面。夕焼け・雲・静かな・虫・カラス・風りん・太陽などなど。

カ 雲焼けて静かに夏の夕かな

ひざをかかえて空をながめる

さびしさつりのり空をながめる

a 夏の終わりを連想させて、少しさびしい。

b 海・公園・ひとり・さみしい一家の窓?

エは発句の「静かさ」は祭りのにぎやかさを予感させるととらえ、夕焼けの赤とほおずきの色を映発させようとしている。オの「ほどよい暑さ」とは、発句に夕涼みのくつろいだ気分をとらえたのであろう。付句をつけるという活動は、まさに言葉への感性をみがく学習である。さまざまな連想の中から音を取りあげて付けようとする発想は他班にもみられた。カは夏の終わりの季節感をとらえている。「空をながめる」を固定して、あれこれ考えている様子がわかる。

【実践例2】 1997.6 対象：1年生

実践例1では、ブレンストーミングによって付句の発想を引き出す方法を使ったが、1997年度には、具体的に読みの視点を与える方法を試みた。次のプリントを与え、例を参考にして自分が選んだ発句について書き込みをしながら、脇句の発想、連想の糸口を生み出すのである。

「対話と詩の創作」―言葉の世界をひろげよう―
連句で遊ぼう (平成9年6月) 組 番号

連句の練習! 発句を選んで脇句を作ってみよう
◎ 連句のやり方を練習するために、発句案の中から一句、気に入った句を選んで、脇句(ア・イ)を作ってみよう。
【発句案】

a
b (イ)

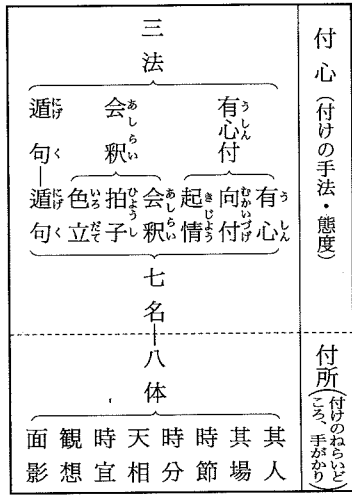
たとえば発句が「この句」とすると

<p>発句 稚の泣く声たのもしき五月かな 健悟</p>	<p>手順① イメージを作ろう</p> <p>前句はこんな句 ○場所・時間・天気は? よく晴れた五月の日 十時ごろ? ○誰が(誰と)どうしている? ○気持ち・思い かわいい 元気に育て! ○ズームアップ(くわしく) 小さい手 黒目がちの目 淡い髪 ○パン(まわりに) 若菜・新緑 さわやかな風 ○音・におい 泣き声 たのもしく思っているのは親でなく友達</p> <p>手順② 話をつなげよう</p> <p>想像したことから話をつなげよう ・赤ちゃんが産まれてようこんでる。 ・赤ちゃんの淡い髪をさわやかな風がそよがせている。 ・元気になく赤ちゃんを見守る両親がふと見ると窓の外は木々の若葉が輝いている。</p> <p>このイメージを 七七の言葉で 手とめてみる</p>
-----------------------------	--

脇句案

・髪そよそよと初夏の風吹く
・木々の若葉も光れこのとき
(赤ちゃんのクローズアップ)
(親のよろこびの気持ち)

ここでの指導は、実は芭蕉門の俳人の一人、各務支考*8による「七名八体説」による創作法の考え方を借りたものである。支考によると、連句の付合には、有心・会釈・遁句の三つがあり、有信と会釈はそれぞれさらに有心・向付・起情（以上「有心」）、会釈・拍子・色立（以上「会釈」）に分けられるという。この七つの付け心（付句を作る手法・態度）を「七名」と呼んだ。「八体」は付け所（付句を作る上でのねらいどころ、手がかり）であり、右の図のように、具体的な発想の手がかりが八種類に分けられている。上に示したプリントはこの「八体」を中学生向けにアレンジしようとしたものである。



これまでの実践の中では、後に示す「連想のヒント」(第2次(4)の授業での試み)を使ってきたが、連句指導の総合単元化の発想のもと、俳句・短歌の鑑賞や、その文学表現を読み解く手がかりとして転用できることをねらって、改良を試みている。今後さらに改良を加えて、より使いやすいもの、より有効なものにしていきたい。

なお、第3句以降の句会では次のプリントをワークシートとして付句を進めた。各句の欄の上段は前句の解釈や、前句のイメージをふくらませたイメージを。下段は前句から連想した言葉や付句のアイデアのメモとして活用するのだ。

1 風船便り種を時二つよ (真)	2 ゆれるフランク 旧たまき	3 舟よ風が梅の香運ぶ春の空一花	4 目指すあの店 おおオオの夜一柱	5 雪 大端に反射しよる おたたい	6 ちろほら冷たい吹雪 顔につけ一真	7 白く吐く息 まよる胸の鼓動 胸の鼓動と 白い息
---------------------	----------------------	---------------------	----------------------	-------------------------	-----------------------	---------------------------------------

フランクゆれる 日たまりの中

1 風船便り種を時二つよ (真)	2 ゆれるフランク 旧たまき	3 舟よ風が梅の香運ぶ春の空一花	4 目指すあの店 おおオオの夜一柱	5 雪 大端に反射しよる おたたい	6 ちろほら冷たい吹雪 顔につけ一真	7 白く吐く息 まよる胸の鼓動 胸の鼓動と 白い息
---------------------	----------------------	---------------------	----------------------	-------------------------	-----------------------	---------------------------------------

連句で遊ぶ (1) 1 風船便り種を時二つよ (真)

2 風船便り種を時二つよ (真)

3 舟よ風が梅の香運ぶ春の空一花 (真)

4 目指すあの店 おおオオの夜一柱 (真)

5 雪 大端に反射しよる (真)

6 ちろほら冷たい吹雪 顔につけ一真 (真)

7 白く吐く息 まよる胸の鼓動 (真)

2. 座のコミュニケーションの中での共同制作

次に示すのは、1994年3月の実践において、初めて連句創作を体験した生徒たちが、学習のまとめに書いた感想の一部である。

- 自分で作った句がとてもよい雰囲気だったりするととてもうれしくなる。グループ内でアイデアを出し合い、より楽しい句を作り上げていくところに俳句と違った面白味を感じた。
- 私は俳句とか作るの好きではないし、苦手だけれども楽しくできました。一人ではなくてみんなでいっしょに考えられるから楽しいのです。
- 積極的に話せたこと。自分の考えを句のアイデアをとおして伝えることとか、他の人の考えを自分に取り入れていくことができるようになるなあと思った。

連句が俳句や短歌の創作と大きく違う点は、座の対話の中から作品が生み出されていく共同制作の文芸であるということである。この特質は、そのまま国語科教育における新しい「対話」の学習のスタイルとして活用できることを示唆している。相手の句をしっかりと受けとめ、それを発展・変化させて自分の句を返すという連句の付け合いは、まさに対話の呼吸そのものなのだ。

さらにまた、生徒たちは次のようにも書いている。

- 連句をやっている人の意外な一面を見るようなことが多かったと思います。連句で歌を作っているときには、みんな恥を捨ててやらないといけないからからかなあと思いました。」
- 「連句は二回目でしたが、作る時は初めてのときと変わらないくらい新鮮な句に接することができました。それはたぶん、メンバーが一人一人とても個性的だったからではないかと思います。ときには意見があまりにも食い違い、お互い険悪なムードになったり「私は絶対この句じゃないとやだ」と自己主張を押し通す人がいたり、危なげに連句を作ってきたように思います。そうして一句一句確実に正確におかしげにこの連句「五彩の巻」ができあがったわけです。がんばった私たちに拍手。

ここには単に技能的に対話の呼吸を学ぶこと以上に、心を開きあい、互いに存在を確かめ、認め合っていく中で、よりよい作品を生み出そうとする生徒の姿があると言えよう。そこで、国語科教材としての連句の有効性の二点目として、共同制作の文芸としての側面を取り上げ、生徒たちが対話をとおして付け合いを進めていく様子の例を示すことにする。

【実践例3】 1994.3 対象：1年生

(1) 対話を中心に共同制作を進めるにあたって

連句創作の授業では、一人一人が即座に付句を提出していく一般的な句会の方法に加え、句になる前の「こんなふうにしたら」というアイデアを句案として出しながら進めてよいことにしている。句のイメージをメンバーで話し合っただけで定型に整え、できあがった句はそのアイデアを出した生徒の句とするのである。これにより、俳句や短歌作りの苦手な生徒でも楽しく創作

活動に取り組めるようになると同時に、対話の機会がより多く成立することになる。

ところで、話し合いの指導においては、話す意欲と内容をどうもたせるかが大きなポイントになる。意欲に関していえば、表現活動や創作活動自体が生徒たちの発話意欲を高めるのに効果的である。ただ、連句では、事前に話す内容を用意する時間はきわめて短い。前句が決まるや次の句の話し合いが始まるからである。どうやって付句の発想を助けるかが、積極的に話し合いに参加できるようにする鍵になろう。そこで下のようなカードを持たせることにした。

「題材リスト」は、たとえば、まだ地名が出ていないからどこかの地名を入れて句を作ろうとか、この句に映画のあのシーンを付けたらどうかなどと、発想や連想を生み出したり広げたりする題材として活用するのである。一作品中に同様の題材が重なるのを防ぐため＝変化の大きな作品にするために、出たものは消しながら進めるのだ。

これらの工夫により、次の句案がすぐに作れない生徒でも、全員が付句の話し合いには参加できるようになった。

<p>題材リスト</p> <p>● 連句は人間を見つめ、自然を見つめる生活詩。 四季の風景や生活の中のままさまざまな出来事・ものごとが入ると、より楽しくすてきな作品になります。 □ 次の句を考えるとき、発想のヒントにしよう。 □ すでに出した題材は消し、まだ出ていない題材を積極的に取り入れてみよう。</p> <p>① 山海川 田舎 都会 ② 子ども 親 老人 男女 職業 ③ 夢 恋 思い出 ④ 神 仏 行事 (祭・お正月・クリスマス他) ⑤ ニュース ホットな話題 ⑥ 映画 本 音楽 スポーツ 登場人物 ⑦ 動物 植物 鳥 魚 虫 ⑧ 衣服 アクセサリー ⑨ 天気 空 雲 風 雨 雪 ⑩ 朝夕方夜</p>	<p>連句 連想のヒント</p> <p>(「連想のヒント」)</p> <p>① 風景↓人物…前の句が風景なら、その場にいる人物を想像する。</p> <p>② 風景↓風景…前句の風景から少しカメラを回して、まわりの様子を。</p> <p>③ 人物↓風景…その人がいる場所の様子を想像する。</p> <p>④ 人物↓なせ…どうして笑っているのか、泣いているのかなど、理由を想像する。</p> <p>⑤ 人物・風景↓少し時間がたって(時間をもとして)…前句の場面の前後を想像する。</p> <p>(「月・花」)</p> <p>月…「月」というだけで秋の季節・夏や冬の場合は、「夏の月」とやったり、寒いなどと組み合わせ、「月寒く」などを使うと良い。</p> <p>花…「花」と言えば「桜」・「花の定座では桜の花をよむのが決まり! (すみれの花などは定座の花にならない)。</p>
---	--

(2) 生徒たちの話し合いの様子

授業の句会では、それぞれ短冊に書いて句案が出てきたところで、話し合いに入るグループや、最初から次の展開を話し合い、具体的な場面のイメージを作ってから、それぞれが短冊に句を書いて出し合うグループ、最初から最後まで話し合いながら、句にまとめていくグループ、話し合いながら進めていくが、つまと短冊に書いて進めるグループなど、様々なスタイルで話し合いが行われていく。ここでは、生徒たちの創作現場の様子を具体的な対話の様子と、後に書かせた自句自解の中から浮き出させてみたい。

① 生徒たちの対話の実際

A 「寄り添って一つの傘で遠回り」でしょう。
T カメラ引いて周りを写したら?

左の話し合いの様子は、下の作品の六句目を作る部分をテープから起こしたものである。Tは教師である。「カメラを引いて周りを写したら」という支援は、前頁の「連想のヒント」

- B 道に花が咲いているとか。
 C あ、コスモスは？
 A 脇道にコスモスが咲いている。
 T それいいね。コスモス付けて。
 A 寄り添ってでしょう。
 C コ・ス・モ・ス・が・さ・く……
 D あ、二人を飾るみたいな。
 B ああ、コスモスが二人を祝福してくれてるみたいな。
 A でも、恋じゃないんじゃない？
 D ううん、一つの傘でだから。
 B どうすんの？どうすんの？
 C 「コスモスに」にしようかなって私は思ったんだけど。
 B え、でも七七だから。
 C 七七か。「脇道に咲くコスモスありけり」あ、違うな。
 D コスモスの花は？
 B 脇道に咲くコスモスの花。

② 自句自解に見る話し合いの様子

次に授業の最後にまとめた「自句自解」から、どんな話し合いが行われて句を付けていったのかをしてみる。「……」以下の部分が生徒自身による解説の引用である。

○白いシャツすかして見える未来像 風香
 夫婦で走る満月の夜 風雪
 ……これはそういう夫婦の姿を映した

ものである。しかし前句の未来像の姿でもあるかも知れない。満月の夜に夫婦で走るなんてすてきではないか。「夫婦」という言葉を入れるか、どうしようかと迷っていて、ちらりと言ってみたらこの句に決まった。

○小道の脇にのぞく白雪

K

手を引かれ校門くぐる子供たち

M

……春と言えば、といていろいろ意見を出したところ、入学式という意見が出たので、Mさんがこの句を出した。

の③にあたる指導言である。「題材リスト」は非常に有効な支援の手だてとなったが、「連想のヒント」は生徒たちには使いにくかったようである。この反省から、平成九年(1997)の実践では、28頁の「連句の練習！」プリントを考案することにしたのである。カメラを引いて周りを映すという指示は、新しいプリントでは「パン」という発想の視点にあたることになる。こちらのプリントは有効に働いた。

左の話し合いの結果、この段階では「コスモスの花」で落ちついたが最終句形は、下の作品例のように、後に行われた推敲で定座の花との漢字の重複を避けて「一輪」になった。

発句	美しき銀杏落ち葉を仰ぐのみ	星野立子
脇	光の筋にただ舞い落ちる	有
三	引き裂いて窓から投げし魔のテスト	み
四	梅雨に濡れつつ帰る姿は	明
五	よりそって一つの傘で遠回り	有
六	脇道に咲く秋桜一輪	長
七	見上げれば満天の星月ひとつ	明
八	団子を食べてかわす微笑み	み
九	桃太郎さんきじさるつれて鬼退治	有
十	学芸会はカメラかまえて	長
十一	初花に去年の思い胸にかみしめ	明
挙	みんなで進む希望の道を	み

○十五夜の月と団子を食べよう

仲

満ち足りてそのまま貴方はまどろんで 紅葉 (Y)

……この句の原案は「食べ疲れそのままわたしは夢の中」でした。お団子を食べ過ぎて満腹になると眠くなるじゃないですか。「食べ疲れ」では「食」という字が、三句続いてしまうので、満足してまどろんだという風にしたのです。(H)

……最初は私に順番が回ってきたけれど、結局思いつかなくて、家で考えてきたけれど、推敲でどうしても変えなくてはならないところがあって、今の句は意味は私が考えたものだけれど、言葉は他の人が考えた句になってしまった。(Y)

3. 創作過程での視点論の導入

次に文学創作の面に焦点をあて、「視点の問題」をとりあげてみたい。

連句では、変化と転じを大切にし停滞や後戻りを嫌う。たとえば連句では、ある句を中心にしてその前後の句が似た内容や、似た発想になるのを「観音開き」といって嫌う。これを避けるために考案されたのが、「句の人情」である。

- ・人情自＝視点人物自身の行為が描かれ、その行為が他の人物に及ばない句。

例 髪けずる熊の油の名もつらく 芭蕉

- ・人情他＝視点人物以外の、第三者の行為や様子を描いた句。

例 追たてゝ早き御馬の刀持 去来

- ・人情半＝視点人物の行為が、句中に登場する第三者に及ぶ句。一句の中に視点人物と第三者が同時に登場する句。

例 もの思ふ身にももの食へとせつかれて 芭蕉

- ・人情なし(場)＝句の中に人物が出てこない句。

例 茴香の実を吹落す夕嵐 去来

連句における「人情」とは、「古来、自(人情自)の句、他(人情他)の句、場(人情なし)の句と大別して三句の転じに用いられてきた視点による変化内容の一つ。*9]である。『連句辞典』『連句入門』を参考にして、句の人情「自」「他」「半」「場」の区別の要点を整理すると、左のようになる。

付け合いでは、前句だけでなくそこまでの展開を「誰が見ているのか。誰の行為心情が描かれているのか」を意識して確かめ、「自—他—自」のように、ある句を中

心にその前後が同じ「人情」にならないように付句を作るのである。

この「人情」は、『連句辞典』の説明にもあるとおり、創作における視点の問題である。俳句や短歌の創作においては、眼前の実景や自身の心情を詠むことが暗黙となっているので、視点人物という存在をことさら設定する必要もなく「作者＝視点人物」である。ところが、連句は発句と脇以外に基本的に虚構である。たとえば人情他の句で描かれた人物やその人への認識は、作者が仮に設定したその場面の架空の視点人物から見た様子であり認識であるということになるのだ。

中学生の連句創作において、これを意識させることができれば、文学や文学作品の創作と視点の問題について、生徒自身が創作現場に立つ必然性を持って自然に意識できるようになるのではないか。

【実践例4】 1995.1 対象：2年生

「句の人情」による視点論を導入した授業は、一年の時に一度連句を学習している二年生が対象である。2回目の連句創作なので、1年の時よりもできあがる作品のレベルアップを図るために、「変化と転じ」に注意していくことを指示。その手だてとして、「人情」を導入した。「人情」については、先に示した解説を、1年の時の生徒たち自身の作品を例に説明した。ただし、実際の創作場面では、あまり厳密に人情を判断するのはまだ難しいと考え、句を作るとき、推敲するときに意識する（＝必ずしも人情が解決されなくてもよい）という扱いとした。

(1) 人情を意識した生徒たちの付け合いの例

<作品より>

○木枯らしや海に夕日を吹き落とす	漱石 場
とり残されし柵の花	美雪 場
生け垣に見え隠れするランドセル	夕月 他

※発句・脇が人情なしの句だったので、第三は人情ありの句にしようということになった。

○ちびちびと飲むどぶろくの憂さ	T 自
むら雲の間から射したる月光よ	鷹 場
淡き光がぼくらを包む	駒 半

※自一場一自になる原案（「ぼくを包んで」）を「ぼくら」とすることで半に変更している。

<自解より>

○気がつけば冬の三角輝いて	紅葉 自
悩む女の三角関係	融華 半
色気より食気我らここにあり	禾穂 半

……前の句が恋の句だったので「色気より」と出てきた。この句は最初「自の句」だったが、前の前の句が「自の句」だったので、「我ら」に変えた。

○朝日を拝むイスラムの夏	朱雀 自
目覚めれば私のとなりに見知らぬ顔	蒼龍 半
孕んじったあの日の彼と	白虎 半

……初めは「あの日の夜に」だったけれ、自になって打越と同じになってしまうため、「あの日の彼と」に変えた。

(2) 人情の判断に関する生徒の反応

学習のまとめの中で、「人情の自他半場の区別は理解できましたか」という問に対する生徒の反応は次の通りであった。

できた……48人 だいたいわかった……78人

よくわからない……4人 わからない……0人 無回答……0人

また、学習のまとめに寄せられた感想の例には次のようなものがあった。

- ・人情はぐちゃぐちゃになってしまいましたが、一応考えて作りました。「こうすると人情にまた問題が……」という言葉も、何度口にしたことでしょう。
- ・初めての時は人情や五七五にこだわらなかったが、手直し (=推敲の時) の時に、それにあうように変えたり他の言葉をもってきたりといろいろてまひまがかかったがその分おもしろかった。
- ・前回に比べて、人情の関係ですぐに出てきても消えたりしてなかなか句が作れなかったが楽しくできてよかった。
- ・半の句を表すことばがどうしてもみつきにくく、自他場のみの句になってしまった。

(3) 句の展開の「変化と転じ」への効果

この回の授業では「句の展開に変化を持たせる」ことにより1年生の時よりレベルアップを図ろうという呼びかけで授業を進めた。人情の導入もそのための一つの手だてとして呼びかけたわけだが、これにより生徒たちには「変化と転じ」への意識に1回目(1年生)のときには見られない展開が見え始めてきた。たとえば、

三 焼け野原壊れた家を見る家族	聖 他
四 ねえお母ちゃんお腹減ったよ	亮 半
五 昼寝する夏の日差しと蟬の声	時雨 自

という展開では、阪神大震災を詠んだ三に付けた四は本来、被災者の姿を描いたものであったが、五では震災を離れて、「夏の昼縁側で昼寝をしていたら腹が減った。夏の昼はたいい蟬が鳴いている」という自解にあるように、ごく平凡な風景へと転じている。これは、話が別のストーリーに展開する(変化)というだけでなく、前の句に新しい解釈を見いだして意味を読みかえる(転じ)ができている例である。ここでは句の人情も問題のないように工夫されているが、「変化」への意識が、より積極的な前句の読み方を誘っていると言えそうである。

4. コンピュータ・ネットワークへの対応

最後に、これまでとはやや視点を変えて、コンピュータ・ネットワークの活用という新しい時代の国語科教育の視点での連句の可能性についてふれておきたい。情報を活用し、発信していく道具としてのコンピュータの活用は、国語科にとっても重要な課題であることはいままで

もない。ここでは、本校の加々美勝久(1994)により試みられた「数学教育へのCSCWの活用」の応用として行ったコンピュータ・ネットワークを活用した事例を報告する。

CSCWとは「Computer Supported Cooperative Work」の略で、「コンピュータ支援による協調作業」と訳される。加々美の授業はこれを教育現場に応用する試みとして、黒板代わりにパソコン(以下BBPCと略記)を各端末の画面上に共有しながら、表計算ソフトを使って標本調査を行い、各グループがその結果をBBPCに記入することで統計処理を完成させるというものであった。

これを「連句の創作の授業」に応用してみようと考えた。すなわち画面共有ソフトを使って一台のパソコンをBBPC(連句でいえば、共有の懐紙ということになるか)にし、そこに自分のパソコンのワープロソフトで作った付句案を書き込み、画面上に表示される付句案から一句を選んで治定していくのである。一人一人が作者となって共同で一巻の作品を仕上げしていく創作過程は、CSCWの考え方を導入する上でも無理がない。

なお、ここでは1・2年の国語で連句創作を学んだ生徒のうち、3年の選択教科国語を履修したものを対象に、本格的な歌仙創作を指導したものである。生徒の実態としては、国語の成績的には中位以下ではあったが、連句をやるなら国語を選択するといって集まったメンバーである。

【実践例5】 1995 対象：選択教科国語履修者8名

(1) 学習内容について

- ・歌仙について知る。(4時間) ・歌仙形式の概要を知る。入門書を通して歌仙作品を輪講。
- ・発句に脇・第三を付けることを通して、ソフトの使い方とオンライン句会の進め方を知る。
- ・四句目以降を3グループ毎に別れて進める。(10時間)
- ・完成した歌仙に自句自解を付ける。(2時間)

(2) ネットワークの利用の仕方

① 使用機器とシステムの概略

本授業では専用のグループウェア・システムではなく、パソコン上のコミュニケーションには画面共有ソフトを、また個々の創作の場としてはワープロソフトを使用している。使用機器とソフトは次の通りであった。

パソコン：Macintosh SE/30	画面共有ソフト：Timbukut (Fallaron社)
ワープロ：EGワード (Ergosoft社)	通信プロトコル：Apple Talk (Apple社)

システムの構成は以下のとおりである。

- 生徒用パソコン(ワークPC=WPC)→BBPCで前句や他の付句の案を参照しつつワープロで自分の句案を考える。

○黒板パソコン (黒板 PC=BBPC)→ WPC から付句の案を書き込む。全員の画面に共有される。

○教師用パソコン (マスターPC=MPC)→生徒個々の WPC の作業状況を確認する。

② 句会での操作

このシステムで行う句会は、生徒が考えた付句の案を次のような手順で BBPC に投句して進めていく。

まず生徒は自分の WPC のワープロソフトで付句の案を考える。句の案ができると、それを範囲指定(図1)してコピーコマンドを実行し、クリップボードにデータを記憶させる。続いて BBPC 画面 (黒枠) に切り替えて、左隅にあるアイコンを操作して WPC のクリップボードの内容を、BBPC のクリップボードへ転送する(図2)。今度は画面上で BBPC のワープロを直接操作して今転送した文字列をペーストする(図3)。すると先ほど送った文字列が、BBPC のカーソルがあった場所に貼り付けられる (図4)。

つまり、生徒は「WPC のワープロソフト→画面共有ソフト→ BBPC のワープロソフト」を同じ画面上で操作して付句を投句していくわけである。

今回はとりあえず一人で句の形にしなければならない。題材リストなど(31頁参照)を手元に置いて句作を支援するが、初めて連句をやる生徒では難しいだろう。

(3) オンラインでの付けあいの様子

付句案ができると、それを(2)に示した手順で BBPC に転送して書き込んでいく。自分の案を考えたながらも、早くできた仲間の句が次々と BBPC に表示されていくのを見てそれぞれに感想を口にしたり、隣の生徒と「これうまいね」などと話しながら作業を進めている。句の案がだいたい出たところで、教師が BBPC を操作しながら感想を言い合い、どれを

図 1

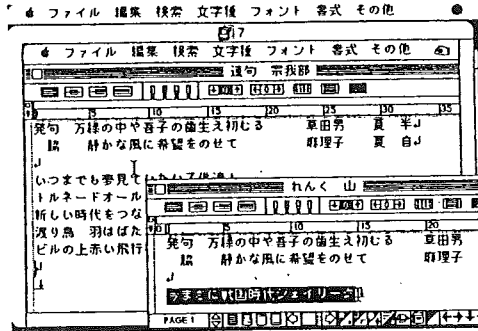


図 2

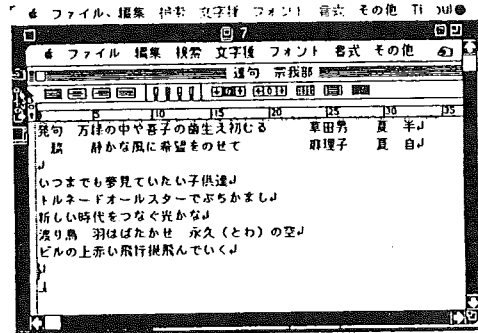


図 3

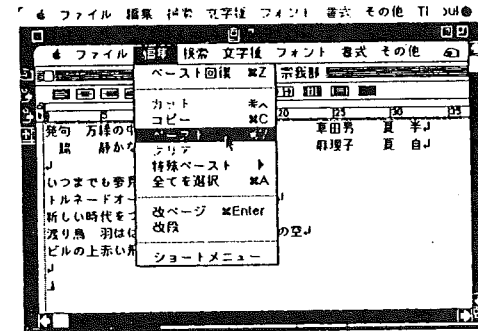


図 4

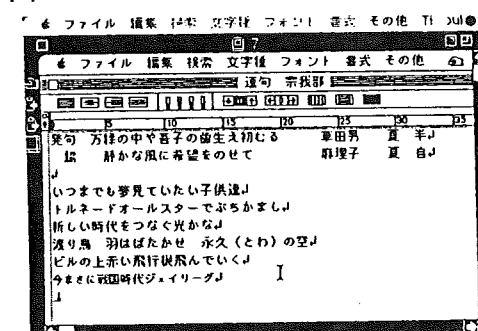
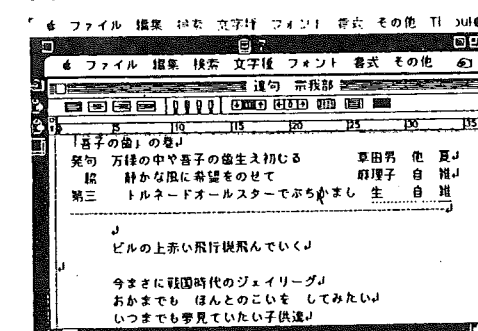


図 5



取るか意見を出し合う。「衆議判」というスタイルである。

教師は生徒たちの意見に合わせて画面上でCut & Pasteにより、支持の多い句を取り出して意見を整理していく。ここでは最終的に、前句の「親の希望」を転じ、大リーグで大活躍の野茂投手をさっそく時事の句として詠んだ「トルネード」の句が全員一致で選ばれた(図5)。作者は「国語は苦手だけど連句は面白かったから選択国語にした」という男子だった。

第4句目からは、進行のスピードを上げるためと、また一人一人の出番を増やすためという理由で、3人ずつの3グループに別れて付け進めた。完成作品の例を43頁に示す。膝送り式の句会に、教師がメンバーの一人として参加したことによる創作上の刺激の大きさはあるにせよ、中学生による連句の作品としては非常に高いレベルの作品といえるだろう。

(4) ネットワークと連句

この実践当時はまだそれほどでもなかったネットワーク環境であったが、パソコン通信やインターネットの普及と共に、本稿執筆の段階ではすでに社会人レベルではいくつかのオンライン句会の開催が報告されている。大手パソコン通信ネット上で10年近くにわたって句会を開いている「PCVAN 連句広場」という結社もあるが、連句という文芸は、実にネットワークと相性がよい。昔から、文音(=手紙の交換による付け合い)という形で連句創作が行われていたわけだが、e-mailによる電子文音はもちろん、コンピュータ・ネットワークの普及により、遠隔地にいる人間が同時にアクセスして、ネットワーク上でリアルタイムの句会を開くことも行われている。

伝統的な文芸である連句だが、これからのネットワーク社会の中で、学校同士を結んで共同制作を行うことがすでに夢ではなくなっている。この意味でも、連句という教材のもつ教育的な可能性は非常に大きいといえよう。

IV 中学校での連句指導試案

最後に、これまでの実践をふまえ、中学で連句の創作の授業を行うための試案を具体的に整理してみた。これらはなお改良の余地が多い段階であるし、指導内容の学年配置、他の国語科の内容との関連と系列化とカリキュラムへの位置づけなど課題も多い。

1. 連句の形式と式目

基本的な形式と約束事については、次の程度とし、指導上教師がおさえおけばよいものと、実際「約束事」として生徒に提示するものとを分ける。生徒には最低限守らせたいことを「約束」として提示し、作品として一定のまとまり(生徒が成就感を得るために大切)を生むための留意点として、定座・句数・去嫌について適宜提示していくようにする。

【指導上の目安として】

形式：十二句からなる「十二韻」（表四句，裏八句という構成と考える。）

※対話が成立しやすく，かつ平均して3～4回の句を出せる形として3・4人のグループを想定した。時数の上でも6～8時間扱いとなり，導入段階としては適切である。

※表裏を分けるのは，歌仙の表六句の約束同様，制作に向かう態度として四句目までは落ちついた句を作るようにしたいという意味あいである。生徒作品が言葉遊びに終わらず，「詩」として成立する上で効果的だ。

定座：一花一月。花は十一句目を定座とする（発句が春の場合，三句目までに出す）月は五～七句目あたりを出所とする。

句数：春秋は二句以上，三句以内。夏冬は二句以内で捨てる。できるだけ四季を配する（少なくとも三季以上を入れることにする）。

恋を必ず入れる。一卷一カ所（二句まで）。

※十二句で四季をすべて入れるのは，現代連句の好みからすればやや詰め込みすぎであるが，生徒たちにとっては次の句を考えるヒントにもなる。

去嫌：すべての句材は一卷一句をめざす。去嫌^{*10}としては，すべての句材を少なくとも二句は隔てたい。

【生徒たちに提示する式目（約束）として】

連句の式目は，実際には非常に複雑で，それが連句を一部の専門俳人や，趣味人たちのものにしてきたことも否めない。教室に導入するにあたっては，生徒や指導する教師自身の実態に合わせて，教室毎にごく簡略化して行うのがよい。参考までに私の実践での例を示す。

- ① 定型ををできるだけ守るが，字余りも可。
- ② 月・花・恋を必ず入れる。
- ③ 季節の配置は清書プリントのガイドを参考に，変更も可。
- ④ 付句を独占しない。話し合いながら句の形にしてもよい。

2. 主な指導内容

次に連句の導入や句会を通して，連句のやり方を指導したり，実際に句会を楽しんでいくために指導したい項目を整理してみる。ただしこれも生徒の実態にあわせて加減して行くべきこととはいうまでもない。

- ① 連句の形式と句の展開の仕方
 - ・連句の形式と句の名称。連句と俳句・短歌の関係。
 - ・約束事（定型・季語・定座など）
 - ・句の展開（連想・変化・転じなど）
- ② 付句の付け方
 - ・前句のイメージ化→連想と想像によって前句を発展

- ・句材・発想の仕方。身の回りを見つめる目
- ・定型への言葉選び
- ③ 句会の進め方
 - ・グループの人数。俳号
 - ・季節や句材の展開・配置
 - ・アイデアから句案へ
 - ・候補の中からの句の選び方
 - ・対話による創作の意識
- ④ 季語・用語
 - ・歳時記の使い方。辞書の活用（逆引き辞典等も）
- ⑤ 変化と転じ
 - ・三句の転じと句の人情
 - ・句材・発想の仕方
- ⑥ 推敲
 - ・同じ字句を避ける。より適切な語法・表現方法。
 - ・言葉のリズム。

3. 句会の場面での教師の指導の仕方

付け合いが始まると、教師は机間指導に徹することになる。指導事例としては以下のとおり。

○前句の読みを深め、イメージを広げるための支援

例 前句はどんな場面？（イメージの拡充）

どんな展開を考えているの？（話し合いの進行）

カメラをちょっとパンしてみたら？（発想のヒント）

○付けあぐんでいないか。付句が停滞していないか。

似た雰囲気や発想の句から抜け出せないときは、投げ込みで投句する。その際は、次の展開のしやすさに配慮し、がらりと場面展開をはかる。明るい句の方が話題がつながりやすい。

以下、「t」とある句が教師が投げ込んだ句の例である。

例 庭先で蟋蟀奏でる大合奏

ちびちびと飲む濁酒の憂さ t

むら雲の間から射したる月光よ

※ときには大人びた句を出すと生徒たちも影響されて、それに応えようとする。

例 月の夜の静かに燃える秋の哀愁

朝には消える昨日の寂しさ

ナナハンで湾岸線をぶっとばし t

海に響くは風とエンジン A

※A男がまだ付けていないので、A男の好きな話題を出して、付句を誘う。

例 星降る夜にかわす口づけ

地震前一目会いたいあの人に

ナイトヘッドの開発をせよ t

※恋の話題から離れられないと呼ばれたので、当時話題のドラマの場面に転じた。

○言葉探し、定型化の支援

「言葉が足りないと感じた」という感想もあるが、ありきたりでないずばりと決まる表現を子供たちなりに求めつつ、語彙の不足によって胸の中のイメージをうまく言葉にできないことがある。そういう場面では、

- ・季語を紹介する。
- ・言いたいことをできるだけ話させて、こんな言い方があると紹介する。
- ・句のリズムを指摘して、前後の入れ替えをアドバイスする。

などの支援をする。

例 桜咲き思い出すのは母の顔

制服着せるさえずりの中

※春の季語（さえずり）を紹介したところ、それを使ってのどかな春景を想像した。

例 月の夜まだ消し切れぬ神戸の火

別れの朝にかわす口づけ

※「に」を「も」にするとどんな効果がある？と問いかける。すると「いつもと変わらずにその日も」という意味が加わると気づき、興味深そうだった。

V 今後の課題

これまでの数度の実践をとおして、国語科教材としての連句の有効性は十分に明らかになったといえる。今後は具体的な指導法の工夫・改善と、国語科の他の指導内容との関わりを整理し、総合単位としての展開をよりはっきりさせて、一般化できる形にしていくことが、大きな課題となる段階である。たとえば以下のような点について検討していきたい。

1. 指導法の側面から

- ① 前句の読みの深化と、そのための読みの技能の指導
 - ・前句の一語一語が担うイメージを掘り下げ、広げる話し合い。
 - ・言葉のニュアンス、レトリックをどう読み出すか。
- ② 付句の発想と連想の幅を広げる支援のあり方
 - ・中学生向け「七名八体」の再検討。

- ・付け合いのパターン化をさける指導のさらなる工夫。
- ③ 視点やレトリック指導のあり方
 - ・句の人情の指導方法改善。
 - ・短詩型定型詩の独特の文体，表現方法，とりわけ俳諧に特徴的なレトリックの指導。
- ④ 創作のための語彙拡充の指導
 - ・歳時記の活用の仕方
 - ・古典や短歌俳句の授業との関連，系列化。
- ⑤ 衆議方式における，提出された付句のアイデアを評価する視点を与える指導
 - ・想像もしていない展開をむしろ楽しむ態度。
 - ・作者自身が句の読みを仲間に開放する発想。
 - ・付句のモチーフを解明する手だて。
- ⑥ 対話・コミュニケーションの学習の成果をより高める指導法。

2. カリキュラムへの位置づけの側面から

- ① 発達段階と学習時期の問題
 - ・中1でも十分に可能だが中2以上がより効果的。
 - ・一度限りでない指導が効果的である。できれば2年・3年と展開したい。
- ② 他の国語科の指導内容との関連＝総合単位としての設定の仕方
 - ・連句の創作を通して育つ「言葉の力」の整理，構造化。
 - ・俳句や短歌の指導との関連。
 - ・理解，表現，言語事項などの領域の中での位置づけの明確化。
- ③ コンピュータ・ネットワークへの対応
 - ・電子メールによる文音。
 - ・チャット機能を使ったオンライン句会の試み。

生徒作品の例

風船便り種を蒔こうよ そよ風が梅の香運ぶ春の空 目指すあの店大晦日の夜 ちらほらと冷たい吹雪顔にうけ うちびるにまだ胸の高鳴り 聞こえる夕日のすき間君の声 水面に落ちる真紅の木の葉 水槽に月影さやか秋の夜 パケツの金魚かすかな面影 宵宮を祭のかけ声にぎわせる 光りこぼれて街にあふれる うるむほど紫陽花青き朝の道	「風船」の巻 高松ちゃば・坪井つば 田中みつち	天の川海の南へ流れけり 静かに聞こえし朝波の音 あけぼのの光あふれる港町 通学途中の学生の群 無人駅月のベンチで彼を待つ 時計ながめてためいきをつく フランスヘナショナルチーム奮戦す 核実験に反対のデモ 広島の死者にささげる菊の花 河に流れてとどけ天国 くるくるとトンビが飛んで春の朝 花咲き乱れ香りただよう	「とんび」の巻 子規 ちゃば つば みつち つば みつち 雅辺 ちゃば つば みつち 雅辺 ちゃば つば みつち
---	-------------------------------	---	--

中学一年生の作品(平成九年)

「春風」の巻

若葉雨にかやさしくものを言ふ 麦南
 落ちついた声眠気をさそう 金
 昼の我ひねもすのらりくらりかな 金
 母のいやみと徹夜の宿題 オダ
 赤い月気がつげばもう新学期 オダ
 うわさの先輩彼女できてた 金
 火も消えてけむりの行方ながむれば 金
 痛いくらいの空と粉雪 オダ
 闇の中幼きころの鈴の音が オダ
 耳に響いて夜も眠れず 金
 春風にもてあそばされる窓の外 金
 うもれるようなたえず舞う花 おだ
 金高金ちやか他
 小田原オダワラダ

中学二年生の作品 (平成六年)

「甲子園」の巻

木枯らしや海に夕日を吹き落とす 漱石
 とり残されし桜の花 美雪
 生け垣に見え隠れするランドセル 夕月
 好きなあいっは野球部エース 夕月
 甲子園短き夏の蟹気楼 秋桜
 彼方見えるは黄金の城 美
 赤トンボ秋を知らせにかけける空 夕
 闇夜に浮かぶ十五夜の月 美
 「おいアツちゃん。その一口がデブを呼ぶ」 秋
 今は懐かし君のグラタン 夕
 八重一重花咲きそろふ並木道 美
 新一年生光る校章 秋
 (荒井美雪・関川夕月・山口秋桜)

「希望」の巻

山茶花や雀顔だす花の中 青蘿
 焼き火煙にゆらく夕暮れ 亮
 焼け野原壊れた家を見る家族 聖
 ねえお母ちゃんお腹減ったよ 亮
 昼寝する夏の日差しと蟬の声 時雨
 祭始まり踊る満月 聖
 綿菓子甘い香りは恋の味 時
 君の名思う秋の初風 聖
 もみじ散り秋は終わるが食進む 達
 黒板悲し自宅学習 聖
 桜咲く校庭歩く一年生 達
 胸の奥には希望の光 時
 (菊池亮・小野田聖・磯貝時雨・杉森達)

「未来像」の巻

山茶花や雀顔出す花の中 青蘿
 ほのかな光幸せの糧 風雪
 白いシャツ透かして見える未来像 風花
 夫婦で走る満月の夜 雪
 いじめられ落ち葉とともに天国へ 風香
 命をかけたウォールストリート 雪
 手を組んで初めて知ったあたたかさ 香
 幸せの瞬間花と乾杯 花
 プレゼント質屋に入れて春の雲 雪
 カザフの子らの目覚める朝は 雪
 焼け具合心も黒い海水浴 香
 沈む夕日に願いを込めて 花
 (赤津風雪・菅沼風花・村瀬風香)

中学三年生の作品 (平成七年)

歌仙「吾子の齒」の巻 旭俊郎・堤信弘・宗我部義則
 発句 万緑の中や吾子の齒生え初むる 草田男
 脇 希望をのせて涼しげな風 麻理子
 第三 トルネード、オールスターでぶちかまし 生
 四 景気回復ならうCM 俊郎
 五 名月も終点まぎわのマイホーム 信弘
 六 勉強部屋に点る秋の灯 雅
 七 女子大の銀杏並木踏み歩き 俊
 八 ボディコン娘純なふりして 信
 九 うっかりとデートのダブルブッキング 俊
 十 後で後悔あわのときのこと 俊
 十一 テスト前明日やるからでもう前日 俊
 十二 闇汁の鍋ぐつぐつとする 俊
 十三 凍てついた窓の外には冬の月 俊
 十四 出たぞ！オウムに解散命令 俊
 十五 すぐさままた待ったのかかるへボ将棋 俊
 十六 七冠目指し散る羽生の夢 俊
 十七 敬礼しお国のために花になる 俊
 十八 原爆展の午後は長閑に 俊
 十九 春の畦歩けば肥が飛びかかり 俊
 廿 カラスが鳴いたらみんな帰る 俊
 廿一 今日もまたカツアゲ・シカト・パシリ役 俊
 廿二 震える指で書く僕の遺書 俊
 廿三 あるもんだブレイボーイの大失恋 俊
 廿四 君のタオルに残るうつり香 俊
 廿五 夏の夜コートで隠す全裸体 俊
 廿六 昼間のパパは国語の教師 俊
 廿七 世界地図インターネットで小さくなり 俊
 廿八 秋葉原での深夜の戦い 俊
 廿九 信長の見上げた月も同じ月 俊
 卅 ヌーボー注ぐギヤマンの盃 俊
 卅一 秋の田は黄金の稲穂敷き詰めて 俊
 卅二 村の一座は明日初日とか 俊
 卅三 喝采を浴びてお猿が宙返り 俊
 卅四 未来を拓く宇宙飛行士 俊
 卅五 夜箒に花ゆらめいておぼつかない 俊
 卅六 子猫の眠る膝のぬくもり 俊

【注】

- * 1 『連句のすすめ』暉峻康隆・宇咲冬男（桐原書店1991）
- * 2 式目は連句の様々な約束事。式目の例は、『連句辞典』1986参照。
- * 3 梅原によるいわゆる「第二芸術論」は、こうした文学観のもとに展開されたものと理解している。
- * 4 「作品と座」尾形侑『座の文学』1973
- * 5 『連詩の愉しみ』大岡信 岩波新書
- * 6 「座談会 俳諧における表現とコミュニケーション」での草間時彦氏の発言。（『俳句・連句療法』所収）
- * 7 たとえば青木幹勇氏は『授業 俳句を読む、俳句を作る』の中で、俳句の学習の価値十項目を指摘している。
- * 8 各務支考は芭蕉門下の俳人（1665-1731）。「七名八体」は連句における付句の発想の方法を七名（有心・向付・起情・会釈・拍子・色立・遁句）と八体（其人・其場・時節・時分・天相・時宜・観相・面影）に分けて整理したもの。
- * 9 『連句辞典』（前掲）pp.113「人情白」の項。
- * 10 去嫌は、ある題材が出たときに、次に同じ題材が出るまでに何句以上間をへだてるかという約束である。詳しくは『連句辞典』等を参照されたい。

【参考・引用文献】

- 『連句辞典』東明雅，杉内徒司，大畑健治編（東京堂出版 1986）
- 『連句入門』東明雅（中公新書508 1978）
- 『連句への招待』乾裕幸・白石悌三（有斐閣新書 1980）
- 『連句のすすめ』暉峻康隆・宇咲冬男（桐原書店 1991）
- 『座の文学』尾形侑（角川書店 1973）
- 『連詩の愉しみ』大岡信（岩波新書 1991）
- 『授業 俳句を読む、俳句を作る』青木幹勇（太郎次郎社 1992）
- 『俳句・連句療法』徳田良仁監修 飯森眞喜雄・浅野欣也（創元社 1990）

【連句に関する拙稿】

- 1) 「創造的な読み手を育てる連句の指導・」1992（お茶の水女子大学附属中学校紀要・第22集）
- 2) 「創造的な読み手を育てる詩の指導 連句教材化の試み」1992（東京学芸大学国語教育学会研究紀要「文学の〈読み〉の指導3」）
- 3) 「連句であそぼう！」1994（『講座音声言語の指導3 話し合うことの指導』高橋俊三編著 明治図書）
- 4) 「対話と詩の創作 連句で遊ぼう」1995（国語教育実践理論研究会「研究紀要」）
- 5) 「グループウェアを活用した連句の授業—選択国語の授業の試みから—」1995（『月刊 国語教育研究』281 日本国語教育学会）
- 6) 「国語科教材としての連句」1996（第59回日本国語教育学会 中学校・言語生活分科会提案）
- 7) 「国語科教材としての連句の可能性」1996（第95回全国大学国語教育学会提案）
- 8) 「連句で遊ぼう！—国語科教材としての連句の有効性とその指導試案」1997.10（『国語教育の理論と実践 両輪』第23号 両輪の会）

本稿は、上記1), 4), 5), 7), 8)を加筆修正して編集し直す形で整理したものである。

なお、生徒作品については、次のホームページにて公開している。ご覧いただければ幸いです。

<http://ume.ft.ocha.ac.jp/gabe/index.html> (ファイル名省略不可)